

聖者は如来様にまします

このように弁栄聖者は、まさしく現代の釈尊であり、生仏いきぶつであられたわけである。生仏という言葉は、世間一般にもよく使われる言葉であるが、聖者を生仏様という場合は、決して言葉の乱用ではないゆえんを、戒浄上人は、次のように述べておられる。

生仏様という言葉は乱用されています。しかし、弁栄上人様を生仏様と申し上げるのは乱用された意味のものではありません。ゴウツクバリ中の

(11) 「自然教・超自然教と円
具教」四・觀照二七号。

ゴウツクバリの私が弁栄上人様に頭を下げるのはよくよくのことであり
ます。⁽¹¹⁾

また、次のようにお述べになっている。

日本では生仏様という言葉は乱用されています。道德上の行いが堅固ぐ
らいのことでは、それも必要ではありませんが、生仏様には断じて価値しませ
ん。如来様と同様のお智慧、お慈悲が頂けねばなりません。弁栄上人様は
文字通り生如来であらせられ、正確な伝記を通して見得る釈尊と同じ御力
を具えておられました。故に私共は弁栄上人様を現代の釈尊と仰がざるを
得ません。⁽¹²⁾

また、聖者がまさしく如来様にましましたことについて、上人は、次のよう
な話をされたこともある。

弁栄上人様は「自分は仏だ」と、おっしゃったことは一度もありません。
しかし、私どもを御済度下さるときの御力がまさに四大智慧・大慈悲の御
力であります。弁栄上人様は、ほんとうに言葉通り生如来様でありました。
世間では生如来という言葉が、しばしば乱用されております。仏法の精神
からみれば全然かけはなれた趣旨によつて生如来という言葉が乱用されて
おります。しかし、弁栄上人様は、四大智慧豊かに成就しておられて、三

(12) 「礼拝儀講話」・全集上巻
一一五頁。



藤本浄本師

大正八年十月、弁栄聖者が佐々木為興師隨行にて藤本師御自坊に御巡錫の時、「藤本師は宗乗学者であるから、前座のお話は柔く」と為興師に御注意になった。その藤本師は光明主義に入信後、よく宗乗を光明主義によつて現代的に生かされた。また戦後浄土宗勸字となられてからも「五重相伝も従来そのままではいけぬ。改革しなければ」とされ、師の五重勸誠のある所、それを起点にして光明会が各地に結成されて行った。光明大系「お慈悲のたより」上 二四四参照

(13)「聖者は正しく如来様に在した」・光明 三三二号。

(14)全集上巻五八四頁。

身の方すなわち法身報身応身であらせられました。こういうことがございました。越後のある奥様の御宅に弁栄上人様数日御滞在遊ばされたことがあります。御出立に汽車をお見送りし、弁栄上人の御顔を拝しますと、如来様のお相でいらつしやいました。このことを弁栄上人様に申し上げますと、「決してそれを人にいうでないぞ」と、おっしゃいました。心の眼開けた人にとっては、実に弁栄上人様は、如来様であります。

藤本上人が御自坊で五日間、弁栄上人様にお願ひしてお別時をなすつたことがあります。駅にお迎えに出られましたが、その前に一度もお会い申したことがありませんでしたので、どんなお方が御存じありませんでした。が、汽車が着いて車からお坊さんが出てこられました。その周囲が光明赫灼としております。それで藤本上人は、これがまさしく弁栄上人であると、知ることができたということであります。心の眼開けた人にとっては、弁栄上人様は、光明赫灼として拝することができたわけであります。(13)

認識的一切智と観念的一切智

上人は、「五眼について」(14)の中で、聖者は、明治十五年(二十(四歳))には仏眼の境界

(15)上人は、このことについて、泉虎一氏の釈尊と聖者の三昧の差についての質問に対する答えの中で、述べておられる(全集中巻一一三頁参照)。

に達せられた、と述べておられる⁽¹⁵⁾。

身口意の動作、とくに心を働かしてことさらに努力しなくても、ひとりでに事ができることを任運とか無功用という。その反対は有功用である。上人は大円鏡智における「功用と無功用」について次のようにおっしゃったことがある。

仏の完全な大円鏡智は、特別に意志を働かさなくても、肉眼といつも同一時に活動している。認識的一切智を実現していられる仏は大円鏡智で宇宙の一切を任運自在に感じていられる。

(16)「成仏の中心道を直進する上で核心となり急所となるもの、自行化他の道において尊く価値あるもの、一切の衆生を中心道に導く対機説法で有効適切なもの、お互いの心を明るく清く楽しく豊かにするもの」

(17)「一番いい道よりそれたもの、有効適切でないもの、そんな事を三昧直観してもあまり価値のないもの」

しかし、かように申しまでも、宇宙の一切の中でその時その時に「尊いもの、価値の高いもの、意味の深いもの」だけを朗朗と任運自在に感じておられるのであって、「中心点をそれたもの、核心をはずれたもの、価値のないもの、深い意義が認められないもの」⁽¹⁷⁾までも朗朗と感じておられるわけではありません。そのような深い意義のないものまでも朗朗と感じておられるというのであれば、真実の仏の円満な認識的一切智ではありません。弁栄上人は三身四智の仏眼で大ミオヤの大円鏡智としかと合一しておられましたので、大ミオヤの大円鏡智の作用によって、観念的一切智の状態で特に注意しなくても、その時その時に「意義あるもの」だけが任運自在に弁栄上人の御心にうつるようになっておられました。絶対積極的能動的

(18) 全集上巻六一七頁、および「佐々木為興上人遺文集」二三四・七三三頁参照。

な任運無功用の境界でありますから、注意しなくても「仏心にふさわしいもの、自他の仏道修行上で価値あるもの、その時その時に相応した意義あるもの」だけが、大ミオヤの御心のままに自然に^{じねん}弁栄上人の御心の中に入つてくるようになっておられました。大正四年、越後柏崎の極楽寺の奥様や、御随行中の大谷仙界、佐々木為興上人の御心の悩みや疑問を直観せられたのも⁽¹⁸⁾弁栄上人のこの御境界でありました。

超一流の宗乗学者

(19) 全集下巻六六三頁。

戒浄上人が弁栄聖者を現代の釈尊として崇敬せられたことは上述のごとくであるが、上人にとって聖者はまた宗祖法然上人の再来でもあられた。このことは、上人の菱田隆道師宛大正十五年五月四日付書簡中⁽¹⁹⁾に、

二祖上人の御光に由て「選択集」及び御道詠を拝して伺ひ奉るを得たる元祖様の正しく御再来と弁栄上人を奉^レ信居り候次第に御座候。

(20) 同上六八七頁。

付書簡中⁽²⁰⁾にも、

弁栄上人ハ宗乗の学者としても真^{まこと}とに拔群、超一流に在らせられ候事を奉

驚歎外無之候。

とあるように、聖者はすぐれた宗乗学者でもあられた。

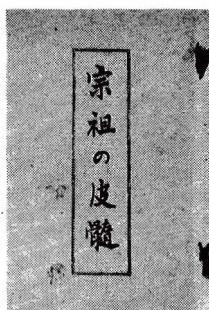
なお、この点について浄光師は、「父の思い出」(一八)の中に、晩年の上人が常に感慨深げに語られた言葉として、次のように記しておられる。

どうも弁栄上人は、宗乗学者としても超一流、断然一頭地を抜いておられたね。上人は従来の宗乗学者が絶えて気がつかなかった点を、明らかにして下さった。「宗祖の皮髓」を注意して拝読すると、あの中で上人は「安心起行の形式」と「起行の用心」とを判然分けてお説きになり、過去数百年間における、宗乗学上の一大疑雲を物の見事に晴らして下さったのだ。

由来わが宗を鎮西流という。元祖大師の正統を伝受遊ばされた鎮西上人が、徹選択集・西宗要等において、あれ程強調して下さいた「見仏義」を、伝統宗乗はすっかり忘れ去って了っている有様である。つまりわが宗において、念仏三昧を発得して如来様にお遇い申すということは最も肝要事であるに拘らず、従来の学者一人としてその大切な所以に説き及ばず、否むしろこれ程重要な事柄を宗学から除外し、これを蔽い隠そうとまでしている。……そんなことなら、何も鎮西上人を流祖と仰ぐには当るまい。

これは結局、三心・四修・五正行は「安心起行の形式」であり、平生・

「宗祖の皮髓」初版本表紙



別時・臨終を通じて、見仏想に住して不退に念仏する、即ち如来様の慈悲の聖容を念いお慕い申して行住坐臥に口称の一行を励むことは、われわれが正しく念仏の行を修するときの心構え、即ち「起行の用心」として絶対的に重要であるということの分別が明らかでなかったために残された疑問であつたのである。

然るに上人は、この両者の関係を判然示され、徹底的に見仏義——如来を見奉ることの大切なこと——をお教え下さつた。

実に上人の眼光は、紙背に徹しておられた！

「宗祖の皮髓」

右の文中にみえる弁栄聖者の「宗祖の皮髓」については、次のようないきさつがある。聖者に帰依せられて後の上人は、元来、謙讓なお方であつたけれども、ますますへりくだつて、機会あるごとに聖者を推輓せられたようである。

大正五年（一九一六）六月、京都知恩院において教学高等講習会が開かれたとき、開催に先立ち、浄土宗務所教学課長の松田實了師は、上人に講師を依頼してきてた。⁽²¹⁾上人は、「私はその器ではないから、その代りに聖者弁栄上人を」と、返事して

(21) 当時、教学部長は、竹石耕善師であつたが、松田師は、教学課長として学校関係、講習会の講師選定等の実務にあつておられた。

(22)「宗祖の皮髓」に關しては、田中木又先生著「日本の光(弁栄上人伝)」三八六頁以下、土屋觀道師法話集「大悲に生きる」一八四—一九〇頁などに詳しい。なお、大光明九六号には、荻野円戒師の聖者「宗祖の皮髓」御講話の因縁と笹本上人の御謙讓「本書上人をめぐる人々(一)」に所収」と題する一文が載っており、参考になる。

(23)全集上巻一〇八頁。

おられる。松田師はかねてより聖者に心服しておられたので、上人のお言葉どおり聖者を講師とする旨、知恩院に通知された。知恩院では、聖者を異安心と目する者があつて、講師とすることにつき異論があつたが、結局、異安心かどうか話を聞いてみよう、ということになった。ところが聖者のお話は、多くの聴衆に実に深い感銘を与えて無事に終つたのである。講話はまとめられて、同年十二月京都一音社より「宗祖の皮髓」と題し出版された。聖者の法然上人觀を示す貴重な文献である。(22)因みに、上人の「礼拝儀講話」によれば、「宗祖の皮髓」が出版された頃、聖者が上人のお寺(慶運寺)においてになり、聖者が上人所持の「宗祖の皮髓」巻頭の聖者自画自贊の「親縁の図」の裏面に、

或禪衲云ク仏本来在「我方寸中」何求「西方十万億彼岸」今日ク淨門意
念於他仏「作」於自仏「所念弥高遠ナレハ能念心随高遠一心念仏即是
心作」仏 若得「三昧」是心是仏

(ある禪衲云く、仏本来我方寸の中に在り。何ぞ西方十万億の彼岸に求めんや。
今は曰く、淨門の意は他仏を念じて自仏を作る。所念いよいよ高遠なれば、能念の心したがって高遠。一心に仏を念ずれば即ち是の心仏を作る。もし三昧を得れば是の心是れ仏。)

念仏者乃心本尊波六十万十万億ノ奥行之堂

其禪神云、佛未在我方寸中何所云、工力極微并
 今日、洋口名念、作伴作伴自伴
 所念、你高遠、下能念、心隨、高遠
 一心、念伴、即是、心伴、伴、不得、三昧、是、念、伴
 念伴者、乃、心、生、生、波、六、十、方、億、廣、行、之、堂
 戒、本、係、止、針、表、是、慧、乃、面、入、箇、日、乃、加、多、仁、思、伴、建、邊、天
 照、由、秀、須、賀、大、平、思、伴、邊、邊、重、感、極、里、奈、加、利、鬼

弁榮聖者御筆「或禪納云ク云々」、戒淨上人御所持の
 「宗祖の皮髓」巻頭に記されたもの。(横浜 慶運寺
 蔵)

(24) 全集下巻六六一頁。

(25) 或禪衲云ク云々の句の意味については、「礼拝儀講話」(全集上巻一〇八頁以下)を、また、聖者が右の句を書き記して下さった「宗祖の皮髓」、いわゆる、戒浄上人相伝本については、光明会本部聖堂発行「宗祖の皮髓」後記を、それぞれ参照していただきたい。しかし、ここで念のため再説しておきたいのは、弁栄聖者は念弥陀三昧によって円満な仏眼を得るのが大乘釈尊の真精神であつて、他の大小乗の教は成仏の中心道、直線道の真理を示すための方便である旨、お示しになつていられる。(光明大系、光明の生活、四版三〇八頁、三〇九頁その他)従つてこの大乘釈尊の真精神を私共にお教え下さるのが聖者の根本精神であつて、又御自身の信念と同一線上にいらつしやるから導空二祖の真精神を伝えるとお示し下さつたことである。宗祖の皮髓」の本説に、「第一、永遠に輝く靈的人格」として宗祖法然上人、「第二、教祖靈的

我美保止計農慈悲乃面入留日乃加多仁映津呂辺天

照留美須賀太乎思保辺婆靈感極里奈加利覺

と、書いて下さつた、という話がみえてゐる。なお、右の句は、上人の菱田

隆道師宛大正十三年九月十三日付書簡にも引用されているが、文中に、

「或ル禪衲」とは六祖慧能師を申されたる事聖者より承はり候ひき

と、記しておられる。ともかく、上人が聖者の法然上人観として「宗祖の皮髓」を、大切に取扱ひ、また、眼光紙背に徹していられたことは、想像に難くない。この点については、また後で触れるであらう。

自坊への招待

聖者に帰依せられた上人は、横浜の自坊、慶運寺に毎月一回くらの割で聖者を招待され、御自身、み教えを受けられるとともに、集会を開いて、多くの人々にも聖者の法話を聞かせておられる。このことについて、当時まだ幼なかつた浄光師は、思い出を、次のように綴つておられる。

上人を自坊に御招待申し上げたときなどは、皆に「上人は実に現代の釈尊でましますから、いやしくも勿体ない振舞なきように」といって、父自

人格の実質」として教祖釈尊について述べられているのはそのためである。

尚御垂示中の文「所念弥高遠ナレハ能念心随高遠」について、上人は「かかることは三身四智の生き如来様でなければ申せないことであります」と述べられた（「大光明」二〇号参照）。



弁栄聖者尊影（大正八年三月
勢至堂山亭にて、弁栄聖者御
写真帳」所収）

らはほとんど御居間にあてた離れに入り切りであった。そのため母など勝手元にも万一不注意があつてはならぬと、ほとんどそのみに掛り切つて、ろくろく御法話を拝聴する暇もなかったという。当時、私はまだようやく学齡に達するか達しない頃であつたために、上人の御法話等については、さらに記憶もない。ただ二、三の印象をたどってみるならば、上人がお出でになると、父はきまつて風月堂から銀紙に包んだ大きな栗——甘く煮て、さらにお砂糖をふりかけてあつた——これは、上人が一番お気に召したといつては求めてくる。実は私もチビ連中もこれが大好き、毎朝——時には寝間着のまま——御挨拶に行つては、手を合せてこれを上人様から頂戴するのが何より楽しみだつた。こんな年頃のことであつたから、この栗を頂戴する場面は、余程うれしかったものとみえて今でも思い出し得るが、上人様の御相好がいかがうで在ましたか、そのときどんなお話をして下さつたかは全く覚えていない。まことに不心得な人間であると、今更慚愧に堪えない。しかし、上人様のお声、殊にお話の合間々々にもらされた称名のお声が、何か深い洞の中から滲み出てくるような莊重な響きをもつておられたことと、姉や女中がお側へ出たときに、私どもの前世の因縁についてお話下さつたことを、小さいときから読み聞かされた「仏様の

(26) 甲斐静也師著。



判の慶運寺の板雲形

(27) 「父の思い出」 九。

お話⁽²⁶⁾」に出てくる釈尊の御説話を連想して、深い感銘を覚えたことは忘れない。

学校に入るようになってからは、上人がみえるたびに、父は半紙を四つ切りにして、それに筆で御案内文をしたため、その後に雲形をした慶運寺の判を捺したものを、何枚ずつか有縁の方々に配布するを常とした。

私はいつもその中の一枚をもつて、当時の校長本多恵学先生にお届けすることが、何か非常な光栄のように感ぜられてならなかった。たしか「人生の帰趣」の草稿は、この青木小学校における上人の御講演の速記に基づくものと聞いている。夜になると庫裡の客間に沢山の人が集まってこられる。この方々の中に交って、私どもも小さいときから暗誦の礼拝儀を声高らかに唱える。そのあとで、上人は、机の上に踏台をおき、それによせかけた急造の黒板に文字や図を書いて御説法をなされた。⁽²⁷⁾

また、上人は、慶運寺へお泊りになった際の聖者の印象を、特に礼拝儀の誦み方などについて、次のように述懐しておられる。

弁栄上人様が私の寺へよく一日、二日あるいは一週間くらいお泊りになることがありました。朝、私がお伴をして礼拝しました。その時、礼拝儀をお誦みになるお声がおごそかで、特に威神光明最尊第一にして、と仰せらるるとき「威神」というお声が大宇宙の中心そのものより出てくるよう

(28)「聖者の俤」・光明二四四号。

弁栄聖者御指導の勢至堂別時
念仏三昧会(大正九年十月)



なお声で、非常におごそかでありがたいと感じました。また、礼拝儀を誦む時間も、今、地方によって違っています。誦むのに三十分も四十分もかかっているという工合です。けれども上人様は、大変短かい時間でお誦みになりました。

讃歌などお歌いになるとき、あまり上手でなかったという人もありますが、しかし、歎徳章は、上人様ほどに厳肅にお誦みになる方は一人もありません。歎徳章の読み方については、弁栄上人は、感じを生かすために随分御苦心になったそうであります。上人様は、よく四本の指をつまぐんで口の中へお入れになり、そのくらいの口をあけて、腹の底より出る声で申すようにと、御懇ろにお教え下さいました。もとはお伴する方が少なかつたものですから、背後におつてもよく厳肅なお上人様のお声が拝聴できましたが、その後、人数がふえまして、はつきりとお聞きすることができなくなりました。⁽²⁸⁾

聖者晩年の別時念仏会

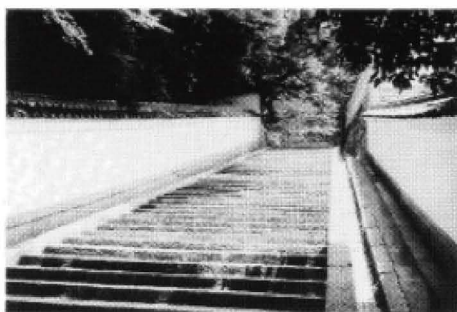
上人は、聖者御指導の別時念仏会などには、万難を排して参加されたようで、

戒淨上人尊影（大正十年五月
写、横浜 慶運寺蔵）



大切な法話が行なわれるときには、聖者の方から出席するようにとのお招きがあった、という。上人が参加された別時念仏会等の年次・場所など、その詳細は明らかでないが、聖者晩年の別時会には、特につとめて参加されたようである。

京都知恩院勢至堂では大正六年（一九一七）より毎年三月一日より一週間、別時念仏会が開かれ、上人は随喜してこれに参加。聖者御遷化の前年大正八年（一九一九）には、聖者は七覚支の法話をされた。この会には、吉岡性空・浅井法順・井上隆森・土屋観道の諸師も参加されたが、休憩時間中には、戒淨上人と土屋観道師を、それぞれ中心とするグループが出来、両師を通じて聖者の広大な徳が讃歎されたので、結衆一同の感激、まことに深いものがあつた、という。また、つづいて四月には、聖者は、新潟県長岡等に巡錫されたが、上人も随行しておられる。また、六月二十六日より福岡県直方の随専寺で開かれた教区講習会では、上人が二日間の前講をつとめ、あとをうけて聖者は三日間、七覚支について講述された。ついで十月には、十六日より二十日まで五日間、広島県二十日市潮音寺で、聖者御指導の別時念仏会が開かれた。この会は、佐々木為興師の主催で、中国の熊野宗純・藤本浄本、九州の丹波円浄・橋爪実誠などの諸師が参加せられ、念仏三十七道品につき講話があつた。このとき聖者は、わざわざ



知恩院勢至堂前の石段

(29) 橋本徳岡氏の御教示による。なお、この会が開かれたときのいきさつ、参会者、会の反響、などについては、『佐々木為興上人遺文集』二二九―二三一頁を参照されたい。

関東より戒浄上人を呼び寄せておられるが、すこぶる緊張した別時会であつたらしい。このときの講話について、後年、上人は「ただもうありがたくて、あまり筆記するひまがなかった。佐々木上人がよく書いておられたようだ」と、語っておられる。⁽²⁹⁾

聖者御遷化の年、大正九年三月上旬には、知恩院勢至堂における聖者御指導の別時念仏会に参加せられたが、上人はその時、聖者の御法話の前座をつとめられた。別時の満願の日に聖者は、上人に「能礼所礼云云」の句を示し指導された。このことにつき上人は、次のように述懐しておられる。

お別時が終りまして帰りがけ、参々伍々大師殿の方に向つて勢至堂の石段を下りて参りました。私はその時間問題を心に持つておりました。これがお念仏の邪魔になっていました。すると弁栄上人様がツト私の傍に來られておっしゃって下さいました。「これはシナのある居士が言つた言葉であるが、

能礼所礼性空寂

感応道交難思議

故我頂礼無上尊

と。ここまで坐禅もやらなければ駄目だ」私はこのお言葉を聞いて、さ

(30) 弁栄聖者著「光明主義玄義」一一〇頁参照。

(31) 全集下巻六七五―六七六頁。



礼拝儀稿本を収めた封筒
(横浜 慶運寺蔵)

(32) 礼拝儀の改訂については、「弁栄上人書簡集」八五―八八頁・六四七―六四八頁・住吉浩然氏稿「愚見」(新・大光明一七五号)・杉田善孝師稿「笹本上人白夏夜話」四(大光明五六二号)、などを参照された。

らりと問題が解決されました。(30)

上人の川島治子様宛昭和五年四月十三日付書簡には、聖者御垂示の右の句が引用されている。(31)

さて、大正九年八月には、十八日より一週間、長野県唐沢山における聖者御指導の別時念仏会に参加せられたが、さきに述べたように、念仏中に聖者から「宗旨を変えてはいけません」との御教示があった。

九月に聖者は、御自作の如来光明礼拝儀の語句数か所を改訂せられ、文法上のは正を上人に委ねられた。これに聖者自らさらに加筆されたものが、御遷化の翌年(大正十年)公刊された。(32)

十一月には、新潟市善導寺において聖者御指導の五重相伝が行なわれたが、上人は、はるばる横浜よりおいでになり、毎日熱心に御勸誡を聴聞せられた。実に上人にとってはこれが聖者の御説法の最後のものとなった。

五重一週間は、昼だけで夜は休みであったので、毎晩、善導寺の吉岡性空・中村弁康・大谷象平・佐々木為興の諸師は座談会を開き、上人が中心となって覚明(わかり)の話をされたのであった。

(33) 田中木又先生作。

聖者御遷化

「弁栄聖者略伝」⁽³³⁾に、

超えて大正九年吹雪に更くる北越の夜寒身に沁む勸化の旅に、老いの御声に尽きぬ如来の御慈悲を伝へて最後の三昧会を木枯悲しき柏崎に導かれ給ひし十二月四日遷化し給ふ。

と、あるように、聖者は、大正九年(一九二〇)十二月四日、新潟県柏崎極楽寺において御遷化になった。御年六十二。戒浄上人はその年、四十七歳であった。上人が聖者御危篤の電報に接し、幼い令嬢(光子)の病気をそのままに出立されたこと、また令嬢は、奇しくも聖者御遷化の前日、三日に急性肺炎で亡くなられたことなど、浄光師の「父の思い出」(九)にみえている。恩師弁栄聖者は遷化され、かつ最愛の令嬢を失われた上人の心中は、いかばかりであつたらう。⁽³⁴⁾

深雪の柏崎極楽寺



(34) 上人は、聖者の御遷化に直面して、ただいたずらになげき悲しまれるようなことはなかった。恒村夏山氏は、その頃の上人を、次のように詠

遺弟たちの宣誓書

遺弟たちが聖者の首唱せられた光明主義のために献身せんと誓った宣誓書が

んでおられる。

師父を失ひし悲の中にも落ちつき給へる笹本上人の御態度を拝しておのづから聖意の程の現れて心もかろし法の師のあと「偲び草」・大光明六五号

伝えられている。

弥陀身心遍法界 影現衆生心想中 光明会 (表紙)

故上人ノ唱導セラレシ光明主義ノ為メ万難ヲ排除シ其ノ宣伝ト発展ニ従事スルコトヲ宣誓ス 大正九年十二月七日

笹本戒淨 熊野宗純 吉岡性空 大谷仙界 佐々木為興 塚田弁応 井上隆森 白根澄海 伊藤定祐 大村心定 清崎専成 松崎俊定 高橋孝順 中山法彦 鈴木憲栄 藤居念常 土屋観道 籠島順故 井上義彰 手柴一海

(35)光明一八四号・二八四号参照。宣誓書は菅野真定師より聖堂に寄贈された。

この宣誓書は、佐々木為興師が熊本県天草郡一町田村崇円寺に伝道の際、住職の手柴一海師が示されたもので、奉書に書かれてあり、日付は、聖者御密葬の当日にあたつてゐる。これは佐々木師が発起でなされたもので、居合わせた遺弟たちがこれに署名されると、大谷仙界師がこれを九州に持ち帰り、心あたりを廻状されて、崇円寺で止まったものと思われる。なお、宣誓書は現在、兵庫県芦屋市光明会本部聖堂に所蔵されている。⁽³⁵⁾